



## おいの池物語

### おいの池 (大淀町・佐名伝)



吉野川畔にある1アールほどの池。池の水は猿沢池と通じ、古来1度も干上がったことがないと言われている。佐名伝は県内有数の梨の産地。

物語の場所を訪れよう

#### 「おいの池」へは…

近鉄吉野線  
大阿太駅下車。  
南へ約  
1.2km。



大淀町役場企画課  
☎0747・52・5501

近鉄吉野線が大阿太駅を過ぎ、下市口駅に向かう中ほど、車窓の南が突然、明るく開け、景色が一変する。眼前に吉野川がゆったりと水量豊かに流れ、川の向こうに低い緑の丘陵が続く。その雄大さ。

吉野川に架かる梁瀬橋の西に佐名伝の集落がある。そこに今も残る「おいの池」。この池に、悲しい物語が伝わっている。

昔、昔のこと。百姓嘉兵衛においという気立ての優しい、きれいな

娘がいた。嫁にという若者もたくさんいたが、断り続けていたそう。ある年の暮れ、おいのは使いに帰った。地蔵堂の前で人のうめき声を聞いた。墨染めの衣を着た若い僧が、にわかな腹痛で苦しんでいたのだ。おいのは、その僧を背負って家に帰り、父とともに懸命に介抱した。僧の病気は、やがて治まった。僧は南都興福寺の俊海といい、彼は翌朝、心から礼を述べ、また旅に出た。

ところが、その日以来、おいのの様子が変わり変わった。物思いにふけり、やつれ、池のほとりにほんやりと立って、時に涙を流している。初めて知った激しく切ない恋心。

ある雪の日、おいのはついに興福寺を訪れ、俊海に胸の内を告げた。だが、俊海は、厳しい修行中の身。

「命の恩人とはいえ、どうぞお許しください」といい、寺の中に消えた。おいのは雪の降りしきる中、まんじゅう笠をかぶり、とほとほと村へ帰った。その二日後、池の青黒い水の底においの姿があった。そして数日後、俊海は興福寺の猿沢池においのもんじゅう笠を見つけた。

それにしても、何と不思議なこと。村の池は、底の方で猿沢池とつながっているという昔からの言い伝えはやはり本当だったのか。

その日から、俊海の様子は忽然と寺から消えた。俊海もまた秘めた恋心ゆえにおいのを追ったと噂された。こうして、佐名伝の池はいつしか「おいの池」と呼ばれた。

池面は今も悲しみを湛え、青黒く沈んでいる。

### 大淀町花火大会



大淀町商工会  
☎0747・52・9555

日時：7月19日(土)  
19時50分～20時30分  
(雨天中止・小雨決行)  
場所：下洲千石橋上流吉野川、大淀町側河川敷(近鉄吉野線下市口駅下車。南へ約500m)。  
2500発の花火が夜空を彩る。  
役場からシャトルバスあり。